

名前	テーマ	今回の気づき	意見・感想など
川端 渉	内なる音、外なる音 ～感受するわたし～	清宮陵一さんが最後に話していた人により話し方が違う(強弱や音色など)という観点から、「音」「音楽」の違いについて、自分が話した「自然」「自然 + ファクター(物事が生まれる元となる重要な要素)」に疑問を感じた。 それは「音」「音楽」を幾つかのエレメント(要素)に分解すると解ってくる。  「音」のエレメント 高さ、大きさ、音色。これらは1つの音の「ある瞬間」と捉え、3つの要素がある。それがすぐに鳴りやんでもその間にこれらの要素が「時間」とともに変化する。  「音楽」のエレメント メロディ、ハーモニー、リズム。これら音楽の要素も「時間」とともに変化する。メロディは音の高さが時間に関係する。ハーモニーは協和する音程を持つ複数の音が重なって「時間」と関係する。リズムは音程に加えて音の強弱、音色が一定の規則性を保ちつつ「時間」とともに変化する。  「音」「音楽」の違いはないのではないか? 音は「自然」で音楽は「自然 + ファクター」と冒頭で話したが、ファクターは「時間」なのだ。音も「自然 + ファクター」があり、時間空間の中で、音と音楽の違いはないのだ。 これは運沼執太さんの「～的」と付いているのは、音の形で音でない。からも影響を受けた考えなのだろう。	
杉原環樹	スタディのアーカイブに関わるライターとして参加していますが、個人的にも清宮陵一さんの模索されている音楽の新しい領域に関心があります。新しい領域は新しい領域ゆえに、「言葉以前の感覚」のなかで揺らいでいるもの。このスタディを通して、そこからどんな音楽の姿が見えてくるのか、それをどのように言葉にすればいいのかを、同席させてもらいながら考えていきたいです。	運沼執太さんを迎えた今回のスタディは、いままで一番、頭が混乱した。  前半に出された「音楽と音の境界線は?」という問いは、自分が学生時代を送った2000年代にある種の流行りのように語られた問いだと思う。そうした問いに親しんでいた(つもり)の自分は、運沼さんからこの質問を投げかけられたとき、なんとなくうまいことが言えそうな気がして取り組み始めた。……しかし、その境界線をどう言葉にすればいいのか、ぜんぜんわからない! どのように定義してみても、すぐに頭の向こうから反論が飛んでくる。結果、頭はプシューと煙を出し始め、完全にショートしてしまった。 運沼さんのスタジオからナディッパへの移動中も頭はぼんやりしたままで、最後のまとめの発言では自分でも生煮えのまま、よくわからないことを話してしまった(恥ずかしい……)。  それでもあらためて、あのときの思考を少し整理したい。自分は、「音楽」と「音」のあいだにある「作曲」という行為が、普段、自分が仕事として行う文章の「構成」(誰かのインタビューを記事のかたちに編集し直すこと)と同じ、composition」という英単語に対応していることに注目した。そして、自分が「構成をした」と感じるのはどんなときかを考えることで、「作曲」というものの何かに触れられるのではないかと考えた。  考えたのは、インタビューの「構成」には、人の話を一種の「素材」にする視点が不可欠であるということだ。話を聞いたテープをそのまま文字起こししても、それはほとんどの場合、記事として成立しない。ましてやそこに「構成」はない。文字起こしされた言葉はただの現実の写しで、それをあらためて「素材」として認識し、ある種の(半?)フィクションに昇華することが、自分の考える文章の「構成」というものかもしれない、と考えた。  そう考えると、音楽の「作曲」にも少し似たところがあるのではないか。ただの現象である「音」に規則性や組み合わせを与える、一般的な意味での作曲もそうだし、たとえば今回の移動中、参加者のみなさんが街というものを普段とは異なる角度(横断歩道のリズムや高低差)から見ようとしていたことにも、現実の素材化という視点が含まれていたのではないかと思う。「composition」の出发点は現実の素材化にある? この直感の確かさは、自分の仕事を通して考えていきたい。	今回に限らないが、スタディの会場を「3331」の部屋に限定しなかったことはとても良いことだったと思う。僕自身、いままで訪れたことがなかった多くのスペース(今回の場合は運沼さんの拠点)に入ることができて、毎回、会場に行くこと自体が楽しいです。
村瀬朋桂	音楽と場づくり	気づきというよりメモに近いですが、街中での作曲行為を通して、実はものすごい数の音が街中に溢れているのに、ほとんど認識していないことに気づいた。視覚的にも情報の多い都会では、「感情」に訴えようとする音や音楽も多く、すべての音を真剣に聞いていたら頭が疲れてしまう。特に東京は、どこもかしこもBGMの音量が大きく、流行りのポップスで、街の音や声は耳を済ませないと聞こえない(これが街の音かもしれない)。隙があれば、「感情」に訴えかけようとしてくるので、ちょっと怖いなと思ったり。  聴き手の一人として「感情移入」しない音楽に興味が出てきた(もちろん感情移入できるいい音楽もたくさんあるけど)。自分自身の聴き方で、街の音は音楽的に感じられ、都会の規則的な街並みは視覚的にリズムカルで壮大な楽譜に見えるし、そういう「音さがし」から感情を抜きにしたら健康的な音楽が生まれそう。  今は誰でもスマホで録音して、音楽をつくらうと思えば環境は揃っているし、SNSで不特定多数に共有できるので、そこから「わらしべ長者」のように音を交換したり、集めたり、タイムカプセルのように音を保管して、数年後にその素材と今の素材で音楽をつくらう、何か生まれなかなと妄想したり。偶然そろった素材で、音楽がつくられていく即興セッションを街の中でできたら面白そう。だんだん考えがよくわからなくなってきたので、こまめにします。  作曲ワークをひとりだけでなく、複数人でやったことで気づけたので、良い体験だったと思う。	音楽家視点で考える「音」と「音楽」の違いの話は、非常に興味深かった。 その境界は考えれば考えるほど、どうとでもとれるし、運沼さんが行なっている表現の探究もこれからも見逃せないと思った。 そして、自分自身も何をもって音楽が好きだと言っているのか、考えるきっかけになった。私自身、感情移入させられる音楽に私は疲れているということに気づいた。  今回、作曲体験で、街への興味が自然と湧き、今の街の様子に目を向けて、歴史に思いをはせたり、とても有意義な時間を過ごせた。自分の中で様々な感情が膨らんでいくような体験だった。感情移入させられるより、こういう体験を人と共有したり、音楽家とワークショップを重ねていくことで、広がりをみせたいなと感じた。
鈴木美恵	まちから聞こえてくる音楽	「音楽とは」という命題の解は、楽典であれば音とリズムとハーモニーです。これらが揃ったときに一つの作品になると理解してきました。しかし「都市の中から」という設定で考えた時に、リズムだけ(例えばクラクションさえも、街の明かり)音だけ(エンジン音)、を捨てて自分の脳内でハーモニーをつくる=編集するということも可能ではと考えました。いえ、私たちは日々そのように暮らしているのではないかと。駒沢通りを進み旧山手通りの前後でその音風景は代わります。歴史的な文脈に根づいたものがそうさせているのか、開発のスピードが異なるのか、どちらにしても道の勾配は容易に変わるものではないので「温故知新」「視覚から聴覚」を総動員して新たなまちのアイデンティティを音から考えた寒い夜でした。これが、風、雨音、木の葉がこすれ合う音など自然と調和したものであれば、日々の暮らしの中で私たちは癒され、これは音楽とも呼べるのでは。都市の中ではとがったものが多いので、各自好きな音楽を聴きながら歩いているのかもかもしれません。	最後まで参加できないことが多く残念です。2日続きや場所を代えて夜遅くまでというスケジュールは、当初からわかっていなかったのですみません。 様々な場所、知らないところに行けることはいいと思うのですが、なんとなくテーマと講義の内容の連続性がわかりませんでした。世間で評価された講師の方の何が指針となるのか一例えばご本人に質問しましたが、カメラをコロコロ転がして音を撮る。これが一定の舗装道路であることで何がわかるのか、芝や煉瓦、石畳であればその場所の特性が現れると思うが国や地域差まで語れるのか——もう少し質問の時間があつたらよかったと思います。
宮内俊樹 (名小路浩志郎)	音の生まれる記憶	自分の葬式にかけられる音楽ってのはよく考えたことはあるが、自分が死ぬときに聴きたい音楽という視点は、不思議とまったく考えたことがなかった。たまたま自分が育った町を歩いたがゆえか、なぜかそんなことを考えた。死ぬことは元いた場所に帰ること、土くれになることという意味では、音も音楽も「聴き手」が「記憶」なり「体験」なりならんらかのアイデンティティを重ねたときに作品性を持つのではないだろうか。それは京都造形芸術大学の岡崎大輔氏が「アート作品(市場で価値のあるもの)とアート(体験)は違う」と語っているのと同様に、音が音楽になる瞬間には聴き手からのなんらかの作用があり、それは千差万別であるがゆえにマジックモーメントなのかもしれない。 また音と音の重なりがあって、音楽たりうるのではないかという「問い」は、自分なりにもう少し深めてみたい。	メンバーのみなさんの捉え方も、今回はいちいち面白かったです。
山下直弥	新しい音楽の伝え方、巻き込み方	街を歩いて作曲するというのはとても面白い発想でしたし、「作曲」という概念の広がりを感じて、そもそも「曲」って何だ? というところまで考えてしまいました。 街を歩いて、いろんな音の素材を集めたとき、ふと思ったのが、「街の音って徐々に集中して聞いたなあ」ということです。「東京ってこんなにうるさかったんだ」というのが正直な感想です。常に今はイヤフォンを耳にはめており、自然から生まれる音、街から生まれる音から常に遮断して生きているんだなあと思感しました。最近読んだ本の中に、「現代において音楽は人の感情を左右する感情が溢れるものとなったと同時に、音楽は人間に所有されるものとなった」と書かれていました。公共の音や音楽と言ったとき、自分の情と感情を溢れる音楽とがマッチしなかった場合、それを遮断し、自分だけの世界に入ることが容易となっています。街の中で生きているのに、街の音から自分を遮断するといった行為そのものに違和感を感じたと同時に、その関係性に面白さを感じました。 今回の「作曲」という行為の中で、音と音楽の関係はもちろん、音楽と街の関係性が見えてきた気がしましたし、「東京から聞こえる音楽」というスタディの題名の「東京」という言葉が指している意味やそのイメージがぼんやり浮かんできた気がしました。	